

手をつなぐ子供たち、イタリアと日本の国旗、虹色の空…。どれもが希望にあふれていた。

「私達もお返しの絵を描こう！」と宮城県鹿島台小学校の子供達が描いた絵を2年たち、やっと届ける日がやってきた。

イタリア・ベルガモ郊外のラ・トラッチャ小学校…。

「日本の被災地からいらっしゃいました」とアンナ先生が私たちをご紹介下さり、元気いっぱいな子供達との楽しいひと時を過ごした。

この日、一緒に表敬訪問できたのは、私を含め4名だったが、絵を通して子供達の中に友情のようなものが芽生えたように思えてならない。

最後に今回の訪問にご尽力いただいた廣崎貞雄専務理事をはじめ、名古屋日伊協会の皆様にご心から御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

~~~~~  
イタリア美術事情 (29)

### —美濃とアマルフィの文化交流—

ローマ在住彫刻家 秋山 信茂

2013年の5月にカンパーニャ州・サレルノ県・アマルフィ市で、美濃(岐阜県)とアマルフィが歴史伝統文化の維持・保存と手漉き紙を活用した街づくりを目的に「紙の文化交流」友好協定を結び調印式が行なわれた。そして同年12月には本格的な文化交流として、美濃市の一団が交流のためにアマルフィを訪ねた。

アマルフィと言えばユネスコの(国連教育科学文化機関)世界文化遺産にも登録されている「アマルフィ海岸」に含まれる中心的存在の町であり、アマルフィ海岸はソレント半島南岸の約30キロ続いている風光明媚なイタリア屈指の観光地でもある。

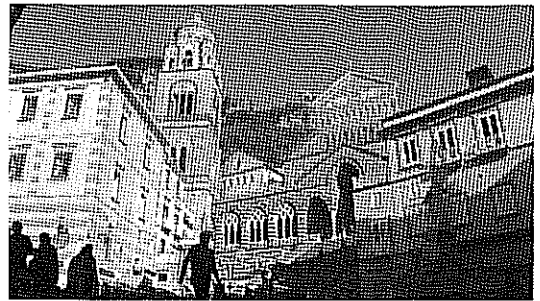
近年アマルフィは邦画の主要撮影地となって日本人の著名な俳優が当地を訪れたり、その公開された映画も話題となって日本人の間でアマルフィの知名度が上がったのを覚えている。またアマルフィの町は中世に地中海貿易で繁栄した海運王国で、中世イタリアの4大海運王国の一つとしてヴェネツィア、ピサ、ジェノヴァなどと海の覇権を争った大国であった。加えて中世より紙づくりが盛んな土地でもあり国内で名を馳せたが、現在では唯一の製紙所が代々製紙の歴史を保っているだけである。

アマルフィの町は溪谷が海に注ぐ急斜面に作られ、柑橘類・レモンの産地である。地中海性気候が育む環境はそれらの生育に適しており、イタリア起源の世界的にも知られる食後酒の「リモンチェッロ」の生産が盛んである。

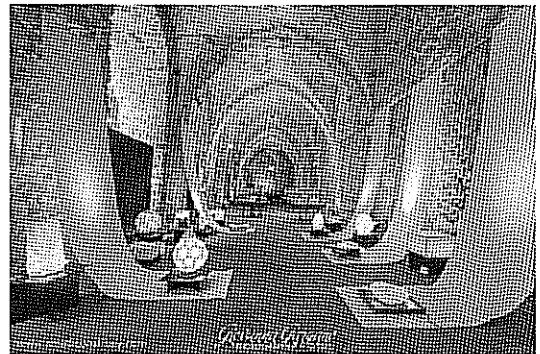
さて美濃市とアマルフィの12月に行なわれた文化交流は「国際学術シンポジウム」、美濃市が毎年主催している「美濃和紙あかりアート展」の優秀作品の展覧会、そして「美濃和紙と美濃提灯のレクチャー・デモンストレーション」の3本柱であった。会場の「アマルフィ海洋公園博物館」は当時の海運

王国の偉業を誇る造船所跡をそのままに残し、内部を博物館としたものである。天井が高く、広い空間は静かで威厳のある空間だ。

美濃和紙あかりアート展の展示は長い帯状の美濃和紙が作品を引き立て、幻想的な雰囲気を出し、多くの来場者の注目を集めていた。また国際学術シンポジウムは「アマルフィと美濃の職人文化、水の都市:手漉き紙の景観、構造と生産の比較」と題して多くの専門家たちによる発表があった。



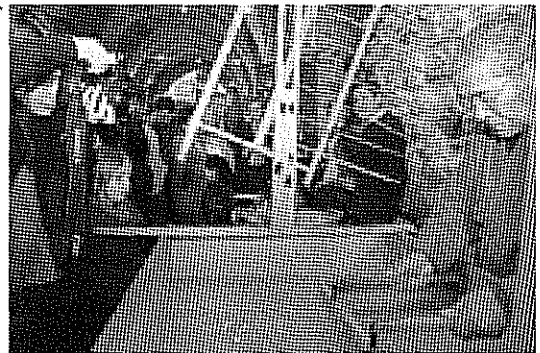
アマルフィ中心地のフラヴィア・ジョーイア広場からドウオーモを見る



「アマルフィ海洋公園博物館」内部の「美濃和紙あかりアート展」の展示風景。

©Giovanna Gargano

<http://www.amalficoast-italy.com/>



「本美濃紙」の紙漉きを披露する「本美濃紙保存会」(国の無形文化財保持団体)澤村正会長

それら文化交流の中で最も注目を浴びたのは美濃紙と美濃提灯の実演とワークショップであった。美濃紙の実演では国の無形文化財に指定されている「本美濃紙保存会」の会長澤村正会長が紙漉きを披露した。イタリアを代表とするヨーロッパの手漉き紙は中